



A hundred years of Phoenix Roebelenii

八丈島ロベ新聞

発行 八丈島産業祭実行委員会
編集 南海タイムス社

1 2023 (令和5) 年 2月1日

ロベ導入から100年 記念特集



フェニックスの祭典

八丈島の花弁園芸が急成長していた1956(昭和31)年、八丈島園芸農協主催のフェニックスの祭典「熱帯植物祭」が開催された。写真は会場の中へ郷小学校に展示した島の観葉植物と、同時に開催した「ミス八丈コンテスト」に出場した島の女性たち(左端は初代のミス八丈)。島空前の祭典絵巻といわれ、八丈園芸のめざましい発展ぶりを全国にアピールする催しとなった。

八丈島の適地適作物であり、市場のシェアを独占し続けているフェニックス・ロベレニイ(略称「ロベ」)。「金の成る木」として、世代を超えて感謝されてきた植物だ。

ロベの栽培は「横浜植木株式会社(本社・横浜市)が八丈島に雌雄2株を植え付けたのが始まり。時期は大正10年ごろ」といわれている。導入から約100年。明治時代に自生地で見られ、八丈島で栽培が始まるまでの歴史を振り返ってみよう。

野生のロベが英国サンダー商会のロベン氏によって発見され、タイのバンコクから各国に販売されたのは明治30年代。以後、欧米諸国では、最優美なヤシとして高値で売買されるようになる。『最新花卉園芸(総合園芸体系8篇)(昭和6年刊)』によると、ロベは明治の末期までロベン氏の専売品になっていた。同書には、八丈島で行われたロベの試験栽培の結果や、結実の方法なども記されている。八丈島でロベ栽培の方法が確立したのは昭和に入ってからのことだった。

横浜植木の創立130周年を記念して誠文堂新光社から出版された『横浜植木物語』に写真左IIによると、ロベの原産地が東洋だということで、各国から横浜植木に引き合いが殺到したと



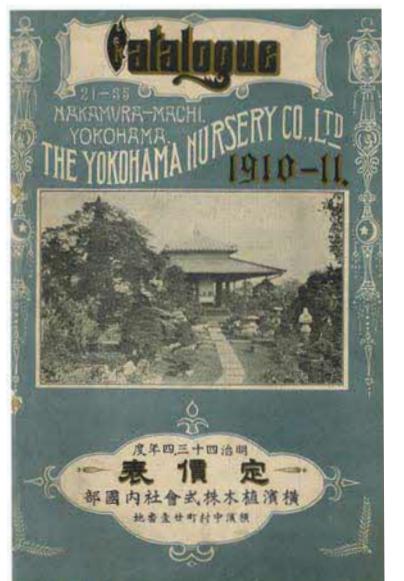
▲「横浜植木物語」(2021年刊)

野生のロベを探せ!

明治43年初めて販売

このときの調査では自生地は発見できなかったが、高木氏はタイから多数の熱帯植物を持ち帰り、同社の輸入品目の範囲は一段と広がった。

ロベが専売品ではなくなり、横浜植木の定価表II写真右IIに初めて登場したのは、翌1910(明治43)年。価格は、「小苗が一本2円、大苗は一本15円」だった。



▲横浜植木株式会社の明治43年度定価表(カタログ)表紙
◀定価表には3種のフェニックスが載っている。写真はロベ

平和の産物

園芸は農業の一分野だが、本来は「園藝」と書き、生きた植物を絶対的素材とする芸術のひとつ、と解釈されている。今、島のいたる所で見られるフェニックス・ロベレニイ。導入からの100年の間には戦争があり、食糧に乏しい観賞用植物は罪悪視された。有事となれば、植物を育て、楽しむどころではなくなる。観葉植物は「平和の産物」なのである。

植物の流行は時代と共に、変わっていく。江戸時代の八丈島



の民家の庭には、桃やイチジク、柑橘類などの果樹が植えられていた。集落は水田や麦、粟の畑に囲まれていた。低い植込みはカキツバタなどの花で彩られ、暮末に小笠原へ向かう途中で八丈島に立ち寄った医師は、その風景を「うらやむべき」といつづっている。

コロナ禍の現代。葬儀の簡略化が進んでいるが、切葉の需要に影響しないだろうか。気候変動でロベが八丈島の適地適作物でなくなる日はくるだろうか。平和は続くのだろうか…。100年の節目に、八丈島の未来に思いをめぐらしている。(編集部)

ロベがフランス領インドシナ(現在のベトナム、ラオス、カンボジア)の原産と判明したのは、1916(大正5)年のことだった。(2面に続く)





自宅の作業場へ持ち込まれたロベの葉は、信夫さんがトゲを取り除いた後、蛍光灯の灯りの下で二人並んで葉先の調整を行う。のんびりテレビを見たり、話をしながらの時間は楽しく過ぎる。「最近は目が見にくくなって大変です」と信夫さん。

ロベは生きる張り合い

三根・佐藤信夫さん夫妻

年をとってもマイペースでできるロベの仕事は八丈島の高齢者の暮らしを支え、健康維持にも一役買う。三根・佐藤信夫さん(88歳)、初子さん(84歳)夫妻は今も毎週ロベを出荷している。信夫さんは榎立、初さんは三根の出身で、ふたりは結婚後に上京、東京・板橋の大山でサンドイッチ屋を営んでいた。Uターンしたのは40年ほど前。信夫さんは帰島してしばらく親戚の船に乗って漁を手伝うなどしていたが、その後、榎立の畑を引き継ぎ、ロベ農家になった。

島は雨が多い。ぬかるんだ足下で、傾斜地の畑からロベを切る作業は高齢者には厳しい。そして、何より必要なのが車。運転免許の返納を機にロベの出荷を止める高齢農家も少なくない。

S.33年 観葉植物の手引書 島の園芸家ら執筆

熱帯植物の楽園・八丈島



常夏の八丈島は、ヤシの島、熱帯植物の島として時代の脚光をあびている。その種類も600種をこえ、その苗は全国の営業家におくられている。

1958(昭和33)年、『観葉植物-作り方の手引-』(誠文堂新光社刊)が、「八丈島園芸農業協同組合」「農耕と園芸編集部」の共同編集で発行された。グラビアのキャプションには、「八丈島はヤシの島、熱帯植物の島として時代の脚光をあびている。その種類は600種を超え、苗は全国の営業家に送られている」「島の空地という空地は、フェニックス・ロベレニーでうずまっている」とある。

島の園芸家18人が、バナナ、マンゴー、パイナップルのほか、アンズリウム、カラジウム、サンセベリア、シダ類、ストレリチア、ブーゲンビリアなどの品種紹介や作り方の手引きを執筆している。園芸先進地・八丈島を記録した1冊だ。

千
万
長
者
い
っ
ぱ
い
の
島

八丈島にフェニックス・ブーム

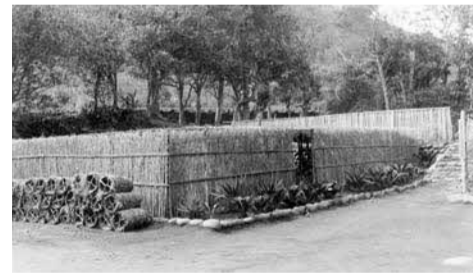


▲1951(昭和26)年発行の『サンデー毎日』の誌面と表紙

S.26年 戦後まもなく ロベブームが話題に

戦時中引き抜かれ…

1930(昭和5)年に岐阜県から八丈島に移住し、印刷所も移転して「南海タイムス」のほか「八丈島園藝新聞」を発行していた吉田貫三さんは昭和11年に小笠原からロベの種を購入、栽培を始めた。写真は、鉢上げしたロベのヨシズ張り鉢仕立場(昭和16年に撮影)。昭和11年に東京の温室村(世田谷)にある森田農園でロベが多く作られているのを見て、露地栽培が可能なら経費がかららないことに着目して同15年、「八丈島園芸組合」を設立、その普及に



に種をつけたが、会社は創立、球根や苗物の栽培を始めた。ロベの種子を何十万と小笠原から持ち帰り、苗を育てたという。「横浜植木が植えつたロベは成木で、すぐう回想している。横浜植木が導入した株のロベは、中之郷・山下清吉村長宅に植えた。中之郷に約5畝の畑を借り、農場を開設した。その農場に勤務し、園芸技術を学んだ島民の中から園芸の先駆者が2人誕生する。」

そのひとり、中之郷・山下甲太郎さんは、ロベの美しさに惹かれ、早くから栽培を始めている。「昭和3年、小笠原から300本の苗を買ったことができた。…確か1本1円50銭でした」。甲太郎さんは雑誌『婦人公論』(1985年5月発行)でこう

う回想している。横浜植木が導入した株のロベは、中之郷・山下清吉村長宅に植えた。中之郷に約5畝の畑を借り、農場を開設した。その農場に勤務し、園芸技術を学んだ島民の中から園芸の先駆者が2人誕生する。」

昭和35年発行の「週刊朝日」に、はたらく日本人シリーズの「八丈島の植木屋さん」として紹介された吉田貫三さんは、戦前、フェニックス増産に力を入れた。が、翌年開戦。1町歩余りの畑や施設内にあったロベなどの園芸植物は引き抜かれた。終戦後の同21年、吉田さんは八丈島園芸組合の組合長として組合員に対し、軍が戦争中に組合員が培養していた植物に与えた損害を組合に報告してほしいとの「告知」を、同年7月13日付けの南海タイムスに掲載している。

の30年計画を立て、農家ののしられることもあったという。開戦直後に入隊。戦後、復員して帰島すると、2万株あったロベ畑はイモ畑になっていた。畑の隅に残っていたロベを売り、再出発した。

昭和16年、ロベ畑に積雪。吉田さんは露地で越冬する確証を得た、と写真帳に記している。

ロベは小笠原で増産

八丈島にフェニックス・ロベレニーを導入した「横浜植木株式会社」は1919(大正8)年中之郷に約5畝の畑を借り、農場を開設した。その農場に勤務し、園芸技術を学んだ島民の中から園芸の先駆者が2人誕生する。

そのひとり、中之郷・山下甲太郎さんは、ロベの美しさに惹かれ、早くから栽培を始めている。「昭和3年、小笠原から300本の苗を買ったことができた。…確か1本1円50銭でした」。甲太郎さんは雑誌『婦人公論』(1985年5月発行)でこう

ロベ 100 年の歴史 since1921~

- 1921 大正 10 ○横浜植木株式会社は、鉄砲百合系のシネンシスを培養するため、大正 8 年に中之郷の畑約 5 畝を借り受けて農場を開設し、ロベの培養も行う (同社農場は、シネンシスにモザイク病が蔓延したため、大正 15 年に閉鎖する)。
- 1928 昭和 3 ○中之郷・山下甲太郎氏は、小笠原からロベ苗を導入する。同年、「八丈島ガーデン」を創立した福田富一郎氏は球根類の培養から着手、小笠原からロベの種子を入手して栽培する。
- 1937 昭和 12 ○月刊「八丈島園芸新聞」が創刊され、島外の園芸界に向けて、八丈島特産の園芸植物の宣伝・販売活動を始める。
- 1940 昭和 15 ○山下甲太郎、福田富一郎、大澤政蔵の 3 氏は、ロベ苗 2600 本を中之郷の各家庭に 10 本ずつ配布する。
○「八丈島園芸組合」が設立される。
- 1941 昭和 16 ○12 月、開戦。駐屯していた軍は食糧増産の名のもと、青年団を組織してロベを引き抜いて焼くよう命令する。
- 1943 昭和 18 ○中之郷で「園芸組合」が誕生する。
○「八丈島園芸新聞」が廃刊。

- 1971 昭和 46 ○花卉園芸の露地栽培の面積が 358 畝と、22 年間で 20 倍に拡大する。
- 1976 昭和 51 ○中之郷・奥山高良氏宅の雌雄 2 株のロベが、導入の原木として八丈町天然記念物に指定される (この原木は山下清吉村長が昭和 27 年、甥の高良氏宅に移植したもの)。
- 1978 昭和 53 ○大型貨客船「すとれちあ丸」が就航し、コンテナによる切葉出荷が大幅に改善。急送便が確立される。
- 1983 昭和 58 ○八丈島ロベ祭実行委員会が「ロベ祭り」を開催。産地形成に功績があった 9 業者 10 氏に感謝状を贈る。中之郷の新堤近くに「ロベ感謝の碑」を建立、導入の原木も移植した。
- 1987 昭和 62 ○切葉の安定出荷、出荷規格作成をめざす「八丈島ロベ共撰共販出荷組合」が発足する。組合員は 33 人。
- 1990 平成 2 ○共撰共販によるロベ切葉を初めてオランダに輸出。



◀ 91年4月28日付南海タイムス

こぼれ話

10 粒植え 7 本発芽

「ロベ 100 年の歴史」は、大正 10 年、横浜植木の鈴木浜吉社長がタイから高さ 60 号ほどの雌雄 2 株のロベを持ち帰り、八丈島に植えたとする同社の『100 年史』や、榎立・磯崎八助氏の著書『八丈の湯と絹と踊』の記録をもとに作成したが、導入時期は大正 5 年との記録もいくつか残る。横浜植木のロベの親株を積んだ船が小笠原へ向けて航行中、時化にあり、八丈島に寄港して雌雄 2 株が降ろされたという「日本花卉新聞」の寄稿文 (京都大学・瀬川弥太郎氏) や、研究論文 (東京農大・増井好男氏) があるほか、山下甲太郎氏も、山下清吉村長の雌雄 2 株のロベは、横浜植木の社長が大正 5 年に南洋航路の船から降ろしたもの、と語っている。



中之郷では、山下村長がロベの種子 10 粒を同村の大澤政蔵氏に写真に播かせ、そのうち 7 本が発芽したという話が伝わっており、これが八丈島でのロベ栽培の始まり、といわれている。政蔵氏は染物業を営むかわら、早くから酪農を始めるなど産業振興の功労者。中之郷小学校で教べんをとったこともあり、山下村長は教え子のひとりだったという。

- 1947 昭和 22 ○「精香園」など貸鉢業者がロベを買い付けに来る。
- 1948 昭和 23 ○貸鉢業大手の「東光園」が来島。ロベの出荷が本格化する。
○8 月、「八丈島園芸農業協同組合」が創立総会を開く。
- 1949 昭和 24 ○1 月、「八丈島園芸農業協同組合」が正式に認可される。
○2 月、「八丈島園芸新聞」が再刊する。
○この年、ロベの 1 尺物は 10 株 3000 円の高値で販売された。翌 25 年の国家公務員の初任給は 4223 円。
- 1950 昭和 25 ○町の花卉園芸栽培面積の調査で、ビニールハウスが初めて対象となり、2,560㎡と集計される (以後、ビニールハウスは毎年増え続け、昭和 45 年は 384,600㎡に拡大する)。
- 1952 昭和 27 ○園芸農協など 3 団体は千葉大、京都大、岡山大などの教授ら学会の権威者を招き、栽培技術の習得、研究試作を進める。
○末吉村婦人会がロベの 2 年生苗を 1000 本購入し、全会員に 10 本ずつ配布する。
- 1953 昭和 28 ○町の花卉園芸販売統計に切葉切花 (1800 万円) が初めて集計の対象となり、基幹作物としての位置づけを確立する。
- 1956 昭和 31 ○8 月、八丈島の園芸を全国に宣伝しようと、園芸農協主催の「熱帯植物祭 (フェニックスの祭典)」が開かれる。初の「ミス八丈コンテスト」の開催や航空会社による遊覧飛行など、一大イベントとなる。



◀ 1955 年のミスユニバース世界大会で 5 位に入賞した日本代表の高橋敬子さんが、ミス八丈コンテストの審査員として来島した (写真は出迎いの八丈島空港)

- 1957 昭和 32 ○八丈島の熱帯植物と球根類の栽培状況を視察するため、全国花卉業界の 271 人が来島する。
- 1958 昭和 33 ○ロベの生産数量が 503 万本、販売数量 24 万本、販売金額は 3300 万円に (『八丈島概況』)。

- 1991 平成 3 ○ロベ鉢物をオランダへ輸出する。
○1991 年の花き園芸の生産高が 26.7 億円となる。このうちロベは切葉が 13.7 億円 (単価 19.2 円)、鉢物が 3.4 億円 (花き生産出荷実績調査)。
- 1992 平成 4 ○オランダで開催された「国際園芸博覧会・フロリアード'92」に出展したロベが 1 等賞を受賞する。
- 1993 平成 5 ○ロベ切葉の出荷額が共撰共販、個撰合わせて過去最高の 15 億円を超える。以後、生産高は減少していく。
○東京都の単独事業で「フェニックス養成施設」(ラスハウス) が整備される。
- 1998 平成 10 ○全国 217 市場のロベに関する市場動向調査が実施され、八丈島の市場占有率が 90% を超える。
- 2015 平成 27 ○2 月に「八丈島観葉植物トレードフェア」が開催。市場関係者が多数来島し、生産者との取引が活発に行われる。
- 2017 平成 29 ○ロベ共撰共販出荷組合が 30 周年。組合員は 273 人。



こぼれ話

「船便待てない」航空農協が設立 定期航空路開設前 自家用機を購入

「5 日間に 1 便しかない船便は待ちきれない」と、1954 (昭和 29) 年、「八丈島航空輸送農業協同組合」が設立され、八丈島特産の観賞用植物の空輸が始まる。その様子を、『南の島に花の飛行機』の見出しで、毎日新聞 (昭和 30 年 3 月 27 日付) が大きく紹介した=写真。

出資金は 500 万円。借入金などと合わせ 1300 万円で米国パイパー製のトライ・ペイサー単発機 (4 人乗) を借り入れ、同年 10 月には同社製の双発機 (6 人乗) を購入する計画のもと、単発機を月 20 回、双発機を月 36 回運航する目標をかかげた。日本最初の自家用飛行機だったという。小宮山源一組合長は「本島の開拓史を飾る記念日」と創立総会で述べた。

昭和 30 年 4 月からは東京~八丈島間に定期航空路が開設される。日本ヘリコプター輸送 (株) の双発ダブ機 (8 人乗) が就航し、夏には同社のヘロン機 (14 人乗) が毎日運航した。同年 3 月から運航を始めた八丈島航空農協のトライ・ペイサー機は、6 月、日本青年飛行連盟がチャーターして広島から藤沢へ向けて飛行中、伊豆半島の山中で墜落、大破した。八丈島航空農協はその後、事業を停止する。

1937-1943
昭和12~18年

記録された園芸史



行發日一回一月毎
料讀購
五部二
銀〇五六年ケ一
(品止停格價)
三貫田吉 兼人 兼行
郵資大島丈八下府京東
社スムイタ海南社會式株
番九二島丈八 番電
番四二六五三京東管報

特産品 島外に新聞でPR

「八丈島園藝新聞」は1937(昭和12)年に創刊、戦況が悪化した同18年まで6年間、月1回発行していた。戦後は昭和24年に再刊して同32年まで発行されている(廃刊の年月日は未確認)。発行人は、南海タイムス社社長・吉田貫三氏。吉田氏は昭和15年に「八丈島園芸組合」、同23年に「八丈島園芸農業協同組合」を設立するなど、この時期、島の園芸発展に力を注いだ。島内外の園芸関係者に向けて発信した園藝新聞もそのひとつで、紙面を通して八丈島特産のヤシ類、観葉植物を広く全国の園芸家にアピール

していたほか、島内生産者に向けては、有望園芸品種の紹介や栽培技術の特集、施肥や病害虫対策などの情報も伝えている。南海タイムス社内に保存されていた同紙のバックナンバーは、すべて行方知れずとなったため、当社は古書店や国会図書館より一部を入手した。戦前の新聞はいまのところ、昭和15年12月1日号しか入手できていないが、戦後すぐに黄金期を迎える八丈島園芸業の礎の一端を伝えている。

【三】 第八冊第 新聞園藝島丈八 行發日一月二十年五和昭 (1937-1943)

八重咲は往々土地に依つて一重と退化することがある、純白の花が稍黄味を帯び半八重になつて三

観葉植物の育て方(一)

ケンチャヤシフエ ニツクス

両者とも観葉植物中で、緑葉の王者であります。白亜の洋館の美しいシャンドリアの下に又は派出やかなダンスホールのカーテンの傍らに、此等の一鉢二鉢が如何に雄麗な感じがあるものかを御覧下さい。温室内の装飾用にも、御客間の窓際飾りにも外國ではなくてはならぬものとされて居り、米國人でさへも其の葉の手入が、妻の一つの立派な仕事として取り扱はれて居る位一般的のものであります。手入れと云つて一番大切なのは、毎日其の葉を海綿か軟かい布片

四年後に一重に成る、是非年々本場産の良球を手に入れるやう御勧めしたのである。

でよく拭つてやる事が大切で、又灌水は適度がよく、多湿は好みません。肥料はかなり充分にやるのがよい。幼苗中は發育が遅々として居りますが三四年からは一年に數葉を出し、比較的小形の鉢に入れて、五尺内外の立派な観賞用に供され得るものが出来ます。繁殖は籜立性のもは分株に依りますが、ケンチャヤシフエニツクスは種子に依るのがよい。種子は硬いものですから、温室内にて充分に浸水してから鉢にまきつけるがよく發芽は相當長期を要します。

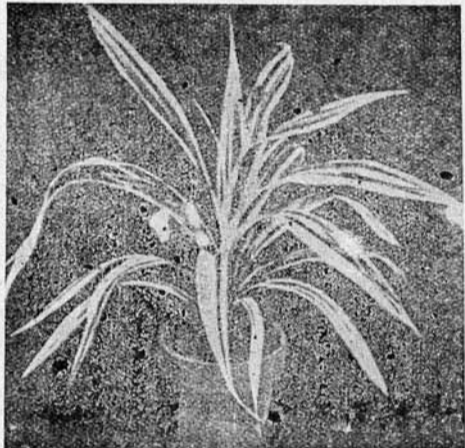
観葉植物大投資

- アレカルーテセンス 二尺苗 十株 一圓八十錢 百株 十五圓
- フエニツクスロベレニー 一尺苗 十株 一圓八十錢 百株 十五圓
- 斑入バンダナス 大苗 十株 二圓
- バンダナス 一名 タコの木 十株 一圓五十錢
- モンステラ 一名 電信草とも云ふ 十株 六十錢
- ハマユウ 一名 電信草とも云ふ 十株 一圓八十錢
- 大谷渡り 十株 一圓
- 青葉ゴム 十株 三圓
- ペンガलगム 印度産の光澤ある丈夫 卵形の大型 一株 八十錢
- ドラセナマツサンゲアナ 美しい黄色斑入 一株 六十錢
- 赤葉ドラセナ 十株 八十錢
- コウモリラン 十株 一圓五十錢

(アレンガイングレー)



斑入タコ (バンダナスロベレニー)



(モンステラ)

知略【二】

夏の花として外人間の人氣は異常なものである。夏の大球なれば花は百パーセント開花するものである、いかに早植しても石

が全部開花、一箱二、三選ぶ可きで、

新ヤシ科植物發賣

- カメロットプスエキセルサ 十株 一圓 百株 六圓
- サバルハバネンシス 一株 八十錢 十株 七圓
- プリツチャデイヤ 一株 八十錢 十株 七圓
- アレンガイングレー 十株 一圓 百株 六圓
- リビシストニヤシネンシス 十株 一圓 百株 六圓
- コ、スウエデリアナ 一株 一圓 二十錢
- ケンチャヤベルモリアナ 一株 一圓 三十錢
- オレオノドキサレギアナ 十株 一圓 百株 八圓
- ケンチャヤマツクアスリー 十株 一圓 百株 八圓
- カリオタソポリフエア 十株 一圓 百株 八圓



(サバルハバネンシス)



(プリツチャデイヤ)



(コ、スウエデリアナ)

▶1940(昭和15)年12月1日発行の「八丈島園藝新聞」の2面と3面。ケンチャヤフエニツクスの育て方を紹介する記事を載せている。広告欄(広告主は「八丈島ガーデン」の福田富一郎さん)には、当時、斑入りタコノキやベンガलगム、ドラセナ類など、現代の人気商品も掲載されており、「八丈島ガーデン」の福田さんの先進性がうかがえる貴重な記録だ。ヤシ類も多く栽培されていた。フエニツクス・ロベレニーは1尺苗が10株で1円80銭の売値がついている。

1949-1957

昭和24~32年

観葉植物は高級品

戦後、園芸の先進地として島外から熱い視線を集めていた八丈島。品目別の園芸植物の値段は、戦後再刊した「八丈島園藝新聞」で確認できる。島外業者向けの値段だが、1949 (昭和24) 年のロベ幹丈1尺物は10株3,000円。同年の国家公務員の初任給は4,223円だから、園芸植物がいかに高級品だったかがわかる。昭和28年のロベの8寸鉢は10本5,500円、ケンチャ・フォステリアナは5寸鉢1本10,000円もした。

気候の優位にあった小笠原や沖縄が戦後、米国に占領されると、八丈島は最暖地として、「東洋のハワイ」「大自然の温室」などと形容されるようになる。が、生産量が増えるにつれ高値で取り引きされていた観葉鉢物は値下がり傾向となり、代わって、輸送面で有利な切葉切花が八丈島の基幹作物になっていく。

この変化は、1950 (昭和25) 年から21年間にわたる花き園芸の販売状況を掲載している『八丈町産業概要』(昭和48年刊) から確認できる。

昭和45年まで拡大を続けた鉢物の生産にかげりが出てくるのは翌年から。一方、昭和28年に統計に初登場した切葉切花類の販売額は増え続け、昭和46年には鉢物の販売額と逆転している。



戦後再刊

戦後の1949 (昭和24) 年2月に再刊した「八丈島園藝新聞」。この年はまだ日本は連合軍司令部 (GHQ) の占領下にあり、すべての出版物はGHQによって検閲されていた。「再刊の辞」が述べられている一面には、検閲の日付と「NEWS DEPT. FILE」が押されている。米国の大学に保管されていたもので、現在は一部が国会図書館に保存されている。園藝新聞は途中旬刊に変わっているが、廃刊を含めてその年月日は確認できない。

ビロウは江戸時代に

八丈島の園芸史を特集した昭和32年3月10日発行の園藝新聞一面。古い文献から1791 (寛政3) 年にビロウが植樹された記録を発掘し、八丈島園芸の草分け、と紹介している。その最古のビロウは、記事によると昭和32年当時も大里にそびえていた。この特集では、ビロウにつづく第二陣は、1916 (大正5) 年の横浜植木会社によるロベの導入、とある。

本島の椰子栽培の歴史、つまりこれが本島の花き園藝の草分けであるが、文献(博物学年表)によると「寛政三年四月(一七九一年、一六六年前)田村元長、鈴木素行幕命ヲ奉ジテ伊豆諸島ヲ巡航シ、薬草ヲ採集シ、椏椰子(ビロウニ該当スル)一株ヲ八丈島ニ植シ八月卅日江戸ニ歸ル」と記している。このビロウに該当すると思われる最古のものが大里に亭々そびえている。そして第二陣として横濱植木株式会社が本島の特殊な亜熱帯的気候に着目し、フェニックス

花き園藝を導き、島民に刺戟を興え、目覚めさせた功績は同社に負うところが大きい。大正末期に八丈島より気候の条件が優位にある小笠原は、蔬菜、花卉園藝が発達し、観葉植物、フリージャ等の球根栽培が行われた。この一部のフリージャが、八丈島に導入されて試作され、又横濱植木株式会社の導入したアキバラガス、水仙、チユーペローズ等が、島民により栽培が試みられ、経営の努力がはらわれた。その熱心な者により研究が行われ、これにより益々刺戟され、花卉園藝に對する関心が高まつて来た。特にフリージャの栽培の確立化と、当時一箱価格四〇圓の高値で無条件に取引されたため、一般に花は金になるものなりと認識せしめるに至つた。

園藝の草分けビロウ

幕府のけい眼一本を植樹

ス、その他観葉植物等を大正五年本島に植付けた当時移植した雌雄のフェニックス、ロベニーが現在中之郷郵便局脇の奥山高良民宅の庭にあり、樹高約一丈五尺に達し、斯業の発展と共に繁茂している。以来同社は、中之郷に出張所を設け、次々と園藝植物を導入し、低廉な労働力を利用して栽培管理をなされたのであるが、次第に島民も自覚し、自ら栽培技術を習得するに至つた。本島に花卉園藝を導入し、島民に刺戟を興え、目覚めさせた功績は同社に負うところが大きい。

記録破りの麦増収
著しい躍進の大賀郷

農家の知性と腕が物を言う。農産物共進会の入賞者発表記事では、反当たり収量の1等は、大麦が中之郷村・菊池規一さんの五石一九三五(=937%)、小麦が大賀郷村・沖山晋さんの三石三四八四(=604%)だった。同日の紙面に、「甘諸王国の実現? 生産額七千万円を目標」の記事もみえる。甘諸(キャベツ)やレタス、セロリーの大量生産は実現し、八丈島は昭和27年、政府指定の蔬菜特産地になる。

甘藍王国の実現?
生産額七千万円を目標

使用種子量實に七斗一升

甘藍を中心とする農産物の今年の出産計画は八丈産業の根本的な大變革が豫想されるばかりでなく、従来論議されてきた、ある適地産業に事實を以つて明快な解答を興え、八丈産業の飛躍的發展が望まれ

昭和20年代は農業王国

戦後の園藝新聞を見ると、昭和20年代の八丈島は農業王国だった。大量の農産物が島外へ出荷され、蔬菜、牛乳は島内で自給していた。1949 (昭和24) 年7月1日付けの紙面には、「記録破りの麦増収」の見出し。「農家の知性と腕が物を言う」農産物共進会の入賞者発表記事では、反当たり収量の1等は、大麦が中之郷村・菊池規一さんの五石一九三五(=937%)、小麦が大賀郷村・沖山晋さんの三石三四八四(=604%)だった。同日の紙面に、「甘諸王国の実現? 生産額七千万円を目標」の記事もみえる。甘諸(キャベツ)やレタス、セロリーの大量生産は実現し、八丈島は昭和27年、政府指定の蔬菜特産地になる。

ネックとなったのは、輸送面のハンディ。加えて、安価なビニールハウスが全国で普及すると、地の利を生かした蔬菜類の端境期出荷のメリットが失われる。その後の離島ブームで観光業が盛んになり、八丈島の産業は大きく変貌していく。

栽培面積と移出高

種類	28年		29年		30年		31年	
	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額
観葉植物類		7,000,000	155.0	12,150,000	194.3	19,860,000	220.3	38,787,000
球根類		6,189,600	187.2	12,904,000	191.8	17,359,000	188.6	21,059,500
種苗類		950,000	9.0	800,000	13.5	1,400,000	16.2	2,100,000
切葉切花類		4,500,000		18,000,000		23,000,000		27,500,000
計		18,639,600		43,854,000		61,609,000		89,446,500

▲花卉園芸の栽培面積と移出高の推移も掲載されている。1928 (昭和28) 年に移出高が700万円だった観葉植物類は、昭和31年に3800万円余、450万円だった切葉切花類も2750万円と、それぞれ3年で5倍以上に伸びている(ちなみに、『八丈町産業概要』によると、昭和45年の販売額は観葉植物類が3億8460万円、切葉切花類は2億円超に)。

昭和30年代に急成長

八丈町農地仲介制度 登録情報一覧

令和4年12月15日 更新

Table with columns: 番号, 所在地, 面積 (㎡), 現況地目, 農地状況, 接続道路, 農業用水, 希望条件 (賃借, 売買), 備考, 交渉状況. Lists 20 registered agricultural plots with details on location, area, status, and terms.



八丈町 農地仲介制度 のQRコード

八丈町農地仲介制度は、「高齢や健康上の理由で耕作が続けられない」「後継者がいない」「農地を相続したが、自身で管理・耕作する意志がない」などの理由で農地を手放したい人が、農地の所在、取引形態(賃借・売買)、希望条件(賃借の年数・賃借・売買額)などの情報を町へ登録。これを希望者に公開して利用希望者を募る新たなシ

2022年5月から

町が農地仲介制度 売りたい農地情報ネットに公開

新規就農を目指す上で、最も大きなポイントになるのが農地の確保。町は2022年5月、所有者が耕作、管理できなくなった農地の情報を集めてネット上に公開。町の仲介によって農地の利用希望者に広く紹介する「八丈町農地仲介制度」をスタートさせた。

町が農地仲介制度

新規就農を目指す上で、最も大きなポイントになるのが農地の確保。町は2022年5月、所有者が耕作、管理できなくなった農地の情報を集めてネット上に公開。町の仲介によって農地の利用希望者に広く紹介する「八丈町農地仲介制度」をスタートさせた。

農地・施設整備生活支援

八丈町で利用できる新規就農や農業経営を支援する主な制度は▽農地の整備▽施設の整備▽生活支援—という3つの柱がある(一部の支援は認

手厚い新規就農者支援制度

八丈町で利用できる新規就農や農業経営を支援する主な制度は▽農地の整備▽施設の整備▽生活支援—という3つの柱がある(一部の支援は認

八丈町の農地流動化面積

(2017~2021年度)

Table showing agricultural land circulation area from 2017 to 2021. Columns: 年度, 賃借(㎡), 筆, 売買(㎡), 筆. Data: 2017 (55,244, 27, 22,749, 18), 2018 (59,776, 36, 87,741, 27), 2019 (103,256, 35, 31,527, 23), 2020 (87,774, 35, 42,239, 33), 2021 (81,938, 34, 75,690, 38).

注) 農地の賃貸契約を5年おきに更新するケースなどでは、当該面積、筆数は更新年の実績にカウントされる。

認定農業者81人

各市町村が農業基本構想に基づいた農業経営改善計画を立て、意欲的に取り組む農業者を認定し、計画達成へ向けて様々な支援を行う制度。八丈町では81人(22年11月1日現在)が認定されており、平均年齢は62.7歳。

八丈島の花卉総生産額 ピークの1990年代は20億円台キープ

「花き生産出荷実績調査」

1990年代、八丈町の花き総生産額は20億円台をキープしていた。最高だったのは91年の約26億7千万円。ロベ切り葉の生産額も93年には、過去最高の15億円を突破している。当時の島の園芸産業統計の指標となっていた「花き生産出荷実績調査」で振り返った。

55品目データ化

同調査によれば、八丈町の総生産額が初めて25億円を超えたのは1990(平成2)年で、翌91(同3)年の26億6900万円がピークだ。20億円台は2003(同15)年まで維持した。91年は切り葉が総生産

ロベ切り葉だけで15億円

「花き生産出荷実績調査」は町、都、農協の各担当が、生産者の露地・施設栽培面積の増減、農協の販売実績や市場情報、さらに東海汽船の貨物出荷量などをもとにまとめ発表していたもの。93年の同調査では、項目

変わることもあった。また、ロベをばいじめ、八丈島の園芸品種は個個出荷が主流で、正確な生産額の把握はできないため、いずれも推計値をもとにしている。

その後、統計対象項目などの都合により調査の内容が変更されたり、簡略化されていた。同調査の結果が南海タイムス紙面に掲載されたのは2010年が最後で、総生産額は約16億円だった。

ロベ鉢物 92年まで3億円超

鉢物は89年の生産額が3億8962万円(出荷数量はコンテナ1873基)だったのに対して、93年は3億円を割った。翌94年は1億4千万円台と大幅に落ち込んでいる。

その後、1億円台は維持してきたが、08年のリーマンショックで景気が低迷。その影響をものを受けて09年は7481万円と1億円を割るまで一挙に落ち込んだ。

Table titled '主要園芸産物生産額 (3年1月~12月)'. Columns: 品名, 出荷数量(千本), 生産額(千円), 前年比(%), 平均単価(円). Rows include Cut flowers (切花), Leaf-cutting (切り葉), and Pot plants (鉢物).

平成3年 26億7千万円 対前年比3.5%増 史上最高

八丈町の平成三年(1992年)の花き総生産額は26億7千万円、対前年比3.5%増、史上最高。園芸産物の出荷量は、前年比7.7%増の1億7千万本を記録した。

1992(平成4)年7月5日発行の南海タイムス1面。史上最高額となった前年の花卉生産高のニュースを伝える

花卉総生産額とロベ切葉、鉢物の出荷数量、生産額

Table showing total floral production and specific categories (cut leaves, pot plants) from 1989 to 2010. Columns: 年, 花卉総生産額(万円), 出荷数量(千本), 生産額(千円), 単価(円), 鉢物生産額(千円).

特別寄稿

八丈島・フェニックスロベレニー100年を思う

「ロベレニー生産減」お取引先・需要の減

1921年に雌雄一対のフェニックスロベレニー株が八丈島に導入されて100年(正確には101年)が経ちました。



浅沼 建夫さん 株式会社 大田花き 営業本部執行役員営業本部長

私は八丈島で生まれ育ちましたが、生活の一部に常にロベレニーの存在がありました。実家は切葉生産者で、周りから「お前はロベレニーのおかげで大きくなれた」とよく声をかけられていました。ロベレニーは八丈島の生活になくてはならない存在と言っても言い過ぎではないでしょう。

ロベレニーに限った話ではありませんが、生産者から小売店(消費者を含め)までが厳しい状況になったのは記憶に新しいところです。このような中、花卉業界には「光」もありました。コロナ禍における「リモートワーク」や「外出自粛」で、いわゆる「おうち時間」が増加。自宅でガーデニングや鉢物、小さなブーケを飾って楽しむ人が増えるなど、ホームユーズ需要の拡大により、花卉業界は復活したと言っている程の活況を呈しました。

人手不足解消策が急務 生産者個人の対応には限界

その一方、国内の切花生産量は1996年の約57・6億本をピークに、2021年は32・5億本と半減。現状も花卉の生産量は減っています。生産者の高齢化、後継者問題に加え、昨今の生産コスト高、物流費の高騰など、生産者を取り巻く環境はより厳しくなっています。八丈島産ロベレニーの国内市場シェアは100%に近いですが、その生産量も減少傾向で推移しています。

コロナ禍の花弁業界

2020年、新型コロナウイルスの感染拡大は、さまざまな業界に大きな影響を与えました。花卉業界においても、小売店舗の休業、時間短縮営業、イベントや冠婚葬祭の延期や中止・規模縮小の流れとなり、花卉類



大田花き市場に届いた八丈島のロベレニーの箱。これからセリにかけられる

お取引先(消費者まで含めて)に喜んでいただくことが最終目標です。その結果として対価をいただくことになり。八丈島産ロベレニーを継続して使用して、喜んでいただくため、引き続き生産者の皆さんの生活の糧となるように、それぞれの方が現場におもむき、声を聞き、改善を継続していただくことを切にお願いしたいと思っています。

歴史を積み重ねて、150年後、200年後もロベレニーとともに繁栄し続ける八丈島であることを心から願う次第であります。

ならないといった現状があります。そのような方々に寄り添い、土地の有効活用につなげていくことが必要です。上記の内容や新規就業への取り組みなどは、行政やJAの皆さんも既に実行していると思えます。ただ、良い仕組みや制度を作っても、使ってもらわなければ効果はありません。農家に寄り添い、理解していただき活用させていくための「孝動」が必要と考えます。

課題を明確にし改善

それらの因果律を大小問わず明確にする。それに対して改善策を立てる。そして実行。その結果をチェック、さらに改善する。このサイクルを回し続けていくことが必要です。われわれ市場も同様の意識を持って仕事をしておられます。八丈島だから、ロベレニー生産者だからという区分けではありません。



2022年11月11日、三根公民館で開かれた研修会。14日の末吉会場と合わせ約60人が出席した

「稼げるときに出荷できない」

八丈島ロベレニー共撰共販出荷組合の研修会が昨年11月11日(三根公民館)、14日(末吉公民館)に開催され、「病害虫の防除の対策」の説明や「共撰共販出荷規格」の確認が行われた。また、農協経済指導部の浅沼昇輔さんは、2022年の年間出荷実績の分析と、それをもとに導いた効率的な生産・出荷対策を説明。さらに、右肩下がりととなっている出荷数量の減少を食い止めるための将来的な産地対応として「集落営農」の可能性についても提言した。

ロベレニー共撰共販出荷組合研修会で提案

集落営農の可能性は



研修会でロベレニーの規格について説明する浅沼昇輔さん

地・八丈島が、今後その地位を維持できるのか。浅沼さんは個人的な提言としながら、5年後、10年後に向けた解決策の一つとして「集落営農」への取り組みを提案した。現在、全国に1万5千以上の組織がある集落営農とは、集落ぐるみで効率的・計画的な土地利用・機械・施設の共同利用、能力や適性(兼業農家、高齢者、女性など)に応じた農作業の分担、地域全体の生産効率と所得の向上を図るために、個別集落、またはいくつかの集落をひとつの単位として

「今は売れているから」生産者の危機感希薄

組織する営農組合など。集落営農は目指す方向性によって①経営発展型②地域貢献型③の2つに分類できる。経営発展型は、▽効率的、計画的な土地利用▽規模拡大▽複合化・多角化——など企業的な営農を行う。生産コストを減らし、ロベレニー以外の品目も取り入れて規模を拡大していくタイプの組織形態だ。一方で地域貢献型は、▽農地の維持、地域経済の維持(女性・高齢者の生きがいや所得確保)▽生活の維持(生活支援、福祉、環境保全など)▽人材維持(Uターン、Iターンを含む)——などが主な目的。「若者を取り込みながら集落内の交流」「地域資源を活用した付加価値の創出」「集落内のコミュニケーション」を深め、地域の人に生きがいを与える」など、第一に地域活性化の原動力となることを目指す。

共撰共販の拡大から

島内にも分業スタイルを取り入れている生産者グループや、高齢になって手が回らなくなった畑の消毒作業や葉先の調整を知り合いに頼む生産者はいる。ただ、島全体の出荷量が少なくなると市場価格が維持される側面もあり、生産者個々の危機感希薄だ。組合員の一人は「最初は共撰共販体制を一部作業の分業化や、畑の共同管理にまで拡大していければと思う。生産者は今は売れているからと、変化を受け入れたがらない。切り葉は個々の農家にとっての仕事だが、産地としての存続も一緒に考えないとジリ貧になる。今は大きな岐路にある」と話している。



共撰共販の集荷は毎週月、水、土曜日の3日間。農協本店の集荷場には、朝早くから会員が結集したロベレニーを持ち寄る。職員らによって規格・等級の選別が行われた後、箱詰めされ、翌日の貨客船で輸送。各市場へ出荷される。

八丈島への導入から100年。長年、島の園芸を支え、また、現在も八丈島産が国内シェアの9割を占めるとされる代表的基幹作物であるロベ。生産開始から1世紀の節目を迎えた今、ピーク時に切り棄たけで15億円を超えた生産額は、半分程度にまで減少した。国内需要の低迷や生産者の減少・高齢化による生産量減少がその要因だ。「ロベ100周年」の企画で2021年10月、農協の呼びかけで5人の若手生産者による対談が行われた。ロベの生産現場の課題や未来への展望が語られた。

進む葬儀の簡素化

対談が行われた時期はまだコロナ禍の最中。コロナによる「巣ごもり需要」で園芸産業はかつてない活況を呈したとされるが、ロベ切り棄に関しはそれほど恩恵はなかった。

どうしたらつながる未来へのバトン

ロベ100年 若手生産者 5人が対談

「葬儀の簡素化が進み、一時は市場から出荷制限がかかった。10年後には祭壇がパーチャルになるのでは」と心配。「小さな鉢物はネットで動いたかも知れないが、そもそもロベの切り葉をネットで買えないから、時給1000円で切ってくれと頼まれるが、竹が生えているような畑は2000円もらっても合わない」「生産量は減ったがロベのシェアはほぼ八丈が占めている。今のところ市場にも

20年は774万枚。個個と合わせても生産量は減少している。現在共撰共販の会員は260人ほどいるが、コンスタントに出荷しているのはこのうち100人ほどだ。「脚が悪くて畑に行け



対談に出席したのは左から中嶋直彦さん、沖山至さん（J A八丈島理事）、村口知功さん（八丈島農業振興青年研究会会長）、喜田吉一さん（八丈島ロベ共撰共販出荷組合組合長）、浅沼美和子さん。中嶋さんと浅沼さんは島外からの移住。沖山さん、村口さん、喜田さんは八丈出身でUターンして就農

先代々の畑だから

道路沿いの畑を見てもロベの葉が青々しているのに切られていない。若手農業者からは「いい畑が借りられない」との声を聞く。後継者がいないという一方、農地の流動化は思うように進まない。「ロベ生産者の主体はシニア層で、シニアの暮らしを支える意味では大きな役割を果たしている。ただ、産地としての将来を考えれば若い意欲的な生産者が条件のいい畑を保有するのが絶対条件」借られる畑は傾斜地が多い。自分も年をとると切れなくなるなど思うと手が出せない「先祖代々の畑を所有するお年寄りは、いつか子どもが島に帰って相続してほしいと望んでいるが、ほとんどの場合、子どもは島に帰る気はなく、畑は荒れていく。何か方策を考えるべきだ」――。

企業の農業に活路

こうした現状を打開する一つの方法が企業の農業への移行だ。農地を集積し、作業を分担するなどした新しい形の農業経営は島では可能か。「現状、一緒にやれるのは夫婦、家族の単位まで。他人同士では売り上げの分配などでうまくいかない。助け合いのレベルはいいが、経営となると無理。マイペースでできるのがこの仕事の良さで、気を遣うのも精神的にしんどい」若い人を対象にシステム化できれば可能性はある。時給を決めて、働ける時間帯に自分ができる作業をやる仕組みを作るなど方法はあると思う「家族で月に5万円、10万円を稼ぐのはわりと簡単だが、20万円、30万円となると寝る間も惜しむことになる。作業を平準化して、効率的な働き方が実現できれば、ス

新規就農者を誘致

八丈島で新規就農を目指す移住者は増えているが、作物に「ロベ」を選ぶ人は意外と少ない。「担い手研修センターはルスカス、レザー、八丈フルーツレモンなどの施設経営作物が主体。ロベは一定の収入を得るのに時間がかかるので参入しにくい」「ロベ農家がどれだけ稼げるかの情報も見えない。農地の輪転はもちらんのこと、年間の売り上げ、経費、労働実態、リスクやそれらへの対策をもっとオープンに示し

八丈町担い手研修センター

ルスカスなど施設園芸が人気 島外からの就農希望者受け入れ

2008年4月に開校した八丈町農業担い手育成研修センター。22年4月に入所した7期生2人を含め、これまでに18人が研修を受けた。島外からの就農希望者に人気が高く、島の農業後継者を育てる拠点となっている。

同センターは現在、西見に面積100坪のハウス16棟と付帯施設の管理棟と倉庫。南原にハウス14棟と管理棟1棟。さらに三根、大賀郷の2カ所にロベ圃場（ネットハウス）を保有する。

研修期間の基本は4年間。研修生は島の先輩農業者らから対象作物（現在はロベ、レザー、ルスカス、八丈フルーツレモンの4品種）の栽培技術や農業経営のノウハウを学ぶ。研修期間中に自分に合った作物を決め、補助や融資を活用して農地取得やハウス整備をすることが可能だ。

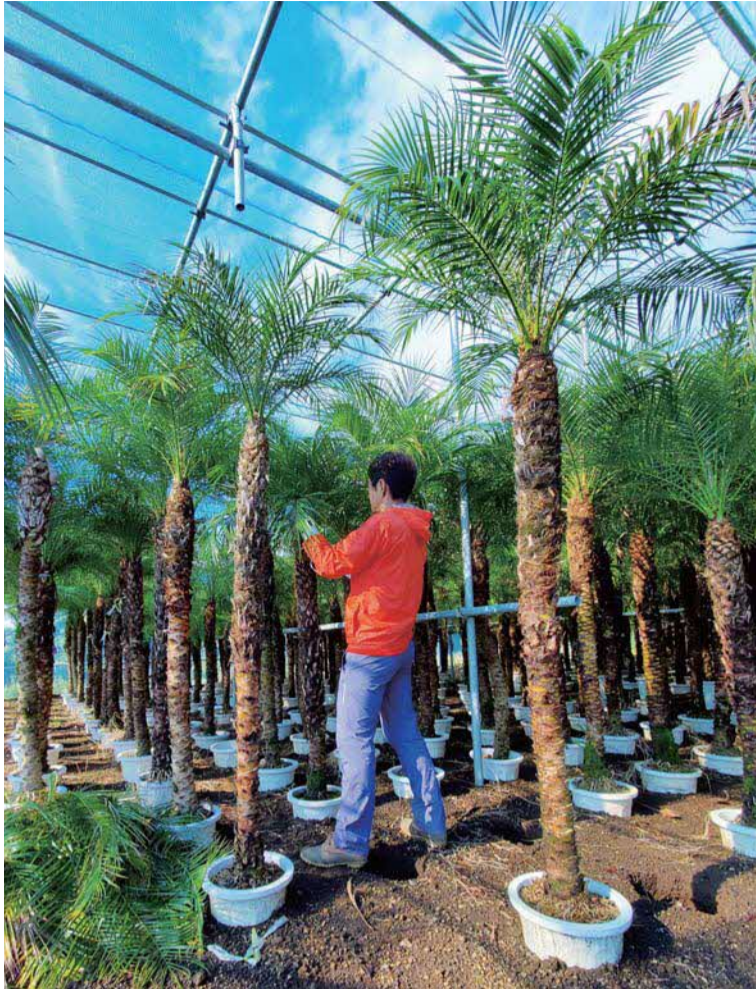
研修生の就農作物（複数選択も含めて）で最も人気が高いのがルスカスで11人。続いてレモン5人、レザーが4人。ほかにロベ、観葉植物、サカキが各1人だ。ルスカス、

レザーの人気が高いのは、施設での農業研修が中心で、坪当たりの収入のよさなどがその理由だ。

一方でロベは苗から始めると、収入を得るまでに時間がかかる。条件がいい、一定の面積がある畑を確保することも容易ではなく、1ターンの就農者が最初に選ぶ作物としては向かないようだ。反面、定年や親の介護などでUターンする人で、実家にもともと畑がある人は、ロベを切りながらのセカンドライフも選択肢になる。



淡いグリーンの新芽が伸びてきたルスカス。2022年11月下旬、西見の研修ハウスで



大賀郷・西見の村口知功さんのロベ鉢物ネットハウス。6、7月に鉢上げした約1200本を翌年の春先から夏前までにすべて売り切る。コロナ禍では観葉植物も人気になった。「回転は早くなしたが、値段は上げなかった。ブームはいつか去るから、その後のことも考える」。島内のロベ鉢物生産者も今では両手に届かない軒数で、切り葉同様後継者不足は深刻だ。日々変化し、多様化する観葉植物市場で100年続いたロベが生き残っていくために何ができるのか、模索は続く。

多様化する観葉市場 生き残りかけ…

「数年前にアフィリエイトでロベが儲かる」と放送したら、役場に「週末だけロベを切りたい」という問い合わせがあったと聞く。全国的な認知度からしたらロベを知っている人はほとんどいない。八丈島も大きい――。

後継者を誘致するべき「学校の職場体験なども、当たりすぎるのか、ロベの切り葉の作業を見るような機会は少ない。小さな時に体験すればUターンするときに『ロベをやる』という気になるかもしれない」――。

「数年前にアフィリエイトでロベが儲かる」と放送したら、役場に「週末だけロベを切りたい」という問い合わせがあったと聞く。全国的な認知度からしたらロベを知っている人はほとんどいない。八丈島も大きい――。

に異色の農業形態があることを宣伝すれば、興味を持って島に来る人はいらぬ」「町、農協、農業委員会それぞれにやれることはある。どうしたらこの産業を残せるか、100年の節目に考えて、行動してほしい」「産地としてのブランド化をどう図るかについては行政の責任も大きい」――。